

こんなときどうする？ 数学授業コーチング

愛知県刈谷市立刈谷南中学校 神谷 和宏

6 子どもを動かすアクティブIメッセージ

どんな子どもにも、自分の考えや欲求が必ずあります。授業中によそ事をしている子どもや、何もしないでぼーっとしている子どもにも、それなりの考えと理由があります。例えば、授業中にノートもとらないで落書きをしている子どもがいたとしましょう。当然、教師はそれを注意します。その場合は落書きをやめ、教師の言うことに従います。しかし、次の日には、また落書きをしています。そんなときにはどうしたらいいのでしょうか？

今月は、教師の気持ちを伝え、子どもの行動に変化を与える「アクティブIメッセージ」をご紹介します。

1 Youメッセージ・Iメッセージ

心理学の分野に、Youメッセージ・Iメッセージという伝え方の技術があります。

2つの違いは、以下のようです。

● Youメッセージ：主語を「あなた」にした伝え方

例「君は宿題をよくがんばっているね」「鈴木さんは計算が速いですね」

● Iメッセージ：主語を「私」にした伝え方

例「君は、宿題をしっかりとやっているのだから先生はうれしい」

「鈴木さんは、先生の出会った子どもの中で、最も計算が早い人だと私は思います」

そして、子どもの行動に変化をもたらしたいときには、Youメッセージではなく、Iメッセージで伝えることの方が効果的です。

例えば、佐藤君が教科書を忘れてきたとしましょう。教師であるあなたは、

佐藤君に対して、Youメッセージで対応したとします。

「教科書を忘れるなんて、授業に対しての意識が足りないぞ！」というような表現になるでしょう。

これをIメッセージで対応すると、

「佐藤君は、クラスのリーダーでもあるし、クラスメイトの見本になるわけだから、正直、教科書を忘れてきたのは、先生としてはとても残念だ…」というような表現になります。

Youメッセージは、子どもをとがめるメッセージになりがちで、抵抗され、恨みが蓄積される可能性があります。

一方、Iメッセージは、子どもの行動（教科書を忘れたこと）をよいとか悪いとか評価しているわけではなく、自分（教師）はこう思う、と素直な心情を伝えています。

また、Youメッセージは、子ども自身を非難しているのに対して、Iメッセージは、子どもの行動（教科書を忘れたこと）に焦点を当てています。子ども自身にも、尊重していることがメッセージとして伝わります（佐藤君のことは、尊重しているよ。ただ、教科書を忘れる行動はよくないよね。佐藤君のすばらしい部分が曇っちゃうぞ…というニュアンスが背景にあります）。

2 アクティブIメッセージの作り方

Iメッセージで伝えても、本当に重要なことは、教師の感情が伝わったかどうかです。子どもに気持ちが伝わっていなければ、伝えたことにはならないでしょう。そんな感情を中心にメッセージを伝え、子どもの心を揺さぶる伝え方を、アクティブIメッセージと言います。アクティブIメッセージの作り方を紹介します。

アクティブIメッセージの作り方

- 1 事実を確認する
(子どもの発言や行為を非難しないで述べる)
- 2 その行為によって生じる影響を伝える
- 3 教師の心情を素直に伝える

(1)行動を変えるアクティブIメッセージ

①発表レポートを忘れてきた子ども

Youメッセージ
「発表レポートを忘れてくるなんて、たるんでいるぞ」

アクティブIメッセージ
「今日は、調べ学習の発表会なんだけど、〇〇君がレポートを忘れてきたから、思うように授業ができなかった。先生はとても悲しい」

②授業中にノートをまったくとらない子ども

Youメッセージ
「先生が大切だと言っているところくらい、ノートに書きなさい」

アクティブIメッセージ
「先生が『ここが大切だよ』と言ったところをノートにとってくれないと、次の時間に何度も復習しないといけないんじゃないかと心配になります」

③授業中に私語でうるさい子ども

Youメッセージ
「静かにしなさい。授業ができないでしょ」

アクティブIメッセージ
「自分勝手な発言ばかりすると、友だちの発言が聞こえず、大切なことを聞き逃したり、発言した子がどう思うようになるか考えたいですね」

もちろん、すべてにおいてこのような会話が展開され、必ずうまくいくということはありません。しながら、日常の授業で教師がイライラを感じるようなことでも、子どもがわざとやっていることはほとんどありません。だから、子どもが知らないでやってしまったことやミスを攻撃的、批判的に伝えると、子どもは心を閉ざしてしまう可能性があります。

(2)承認のアクティブIメッセージ

さらに、日常的に子どもの行動や発言を承認するアクティブIメッセージも効果的です。

- 授業でよい発言をした子どもに対して
今日の発言で「同類項に目をつける」と言ったよね。あれで、多くの子が「わかった！」って声を上げて、授業が楽しくなりました。先生は、君の発言に感謝しています。
- 隣の子どもに教えてあげる子どもに対して
高田君はいつも隣の市川君に教えてあげていますね。隣の子に教えてあげられるということは、よくわかっている証拠だね。きっと、市川君も感謝していると思うよ。
- 普段は活発でない子どもが授業でがんばっているとき
今日は一段とがんばっているね。君ががんばると他の子どももがんばるね。君

はクラスの中で、影響力のある人なんだ。そんな人ががんばってくれると先生はうれしいなあ。

(3)予防のアクティブIメッセージ

また、今、問題が起こっていなくても、いずれ起きそうな問題を感じる時に、あらかじめ予防するためのアクティブIメッセージもあります。

- 1xの1をいつも書いてしまう子どもに対して
1xの1は省略できるんだよね。日ごろ問題練習を行うときから注意しておいてほしいな。定期テストでうっかりミスをする、先生も悲しいから。
- $3+7-(5)$ の計算で途中の計算式を省略する子どもに対して
答えは15なんだ。見た瞬間に計算できるなんてすごいね。でも、基本的な計算だけけど、計算式はきちんと書いた方が間違いは少なくなるよ。次回ミスをする、悲しい気持ちになると思うよ。

3 よいアクティブIメッセージを継続するために

コミュニケーションの基本は、自分の意見を伝えても、相手の考えを聴き、尊重することです。つまり、子どもにとって「先生がしっかり聴いてくれること」これがコミュニケーションの基盤です。

いくらアクティブIメッセージで伝えても、子どもを変わせることが心の奥にあると、しつこく何度も同じメッセージを出すことになってしまいます。これでは、子どもを上から目線で評価し、威圧的メッセージ（お前が変われ!）となり、感情を伝えることが困難になります。

そこでまず、子どもの立場を聴いてあげることが効果的です。聴くことで「抵抗」がとれ、子どもが安心して変わることができ、また、子どもの立場を理解するうちに、教師側の心に変化が顕れることもあります。

子どもは、

「なるほど、それなら自分の方が変わってあげよう。協力しよう」

「先生はそんな気持ちだったのか。それなら仕方ないかな」

「ひょっとすると、先生の言うことの方が正しいかな」

というように、子どもの理解と教師の理解が同時に促進されます。

<参考文献>

- ・神谷和宏『図解 先生のためのコーチングハンドブック』（明治図書）